



# かなしさ貯金



川路 新吉

## かなしさ貯金

ユキエが部屋のソファで本を読み込んでいると、ドアのチャイムが鳴った。

時間はもう日付が変わろうとしているころ。こんな夜遅くに誰だろうとユキエは不審に思い無視しようとした。しかし、いつまでまっても、チャイムが鳴る。ドアの向こうの人物は帰る気配を見せない。

結局ユキエは対応することにした。仕事柄、あまりマンションで目立ちたくはない。

ドアの向こうにいたのは、ごくふつうのサラリーマンのような姿をした男だった。

「夜分おそくに申し訳ございません。ユキエ様でいらっしゃいますか」

相手の思いの外ていねいな態度をうさんくさく感じながらも、ユキエは少し安心した。

すると男は、スッと名刺をさし出した。

「私、こういうものでございます。耳よりな話をもってまいりました」

ユキエの目は名刺に書かれた会社名の部分にとまった。

「『感情銀行』？聞いたことのない会社ね」

「大々的に宣伝してはいないのであまり世間には知られておりませんが、契約者のみなさまにはご好評をいただいております」

ユキエは、それまでドアを開けっ放しで対応していたのだが、ひとまず男を部屋の中に入れて。

男の話に興味湧いてきたのだ。

すると男はありがとうございます、と礼を言い、説明を始めた。

「わが社では感情を、通常の銀行のように貯金することができます。感情を貯めて、好きなときに引き落とすことができますのでございます。もちろん貯めている間その感情には利子がつきます」

ユキエは眉根をよせた。

「どういうこと？」

「たとえばわが社の一番の人気商品『たのしさ貯金』の場合ですと、日々の生活の中で、なにか楽しいことがあったときにこちらの装置についている青のボタンを押して頂きます」

男はカバンから、判子ほどの大きさのものを取り出した。青色と赤色の二つのボタンがついている。

「楽しいことならば、どんな小さなことでもかまいません。その時に楽しいと感じたらボタンを押していただく。そうすると、ユキエ様の口座に『たのしさ』が貯金されます」

ユキエはそこで初めて興味をしめした。

「と言うことは、楽しさが貯金するときと使う時で2回味わえるということ？」

そう質問すると男は慌てて訂正した。

「ご説明が足りなくてももうしわけありません。残念ながら、貯金した時の楽しさはボタンを押し

たその瞬間に消えてしまいます」

なあんだ。と残念そうにするユキエに、男は続けた。

「しかし、貯金していただいた『たのしさ』には先ほどご説明させていただいたように利子がつきます」

「利子？」

「お金の銀行と同じ意味の利子でございます。そもそも『銀行』と会社名につけさせていただいたのも、お客様にこのシステムを簡単に理解してもらえるためです。ただ、お金の銀行とは利子率が違います。お金の場合と違って、お貯めいただいた『たのしさ』はそう時間をおかずに2倍、3倍となります」

男はカバンからパンフレットを取り出し、ユキエの前に広げた。『たのしさ貯金』についての、利子率など詳細なデータが書かれているようだった。

「ほんの小さい楽しさを貯めていただき、たとえば悲しくてどうしようもないときなどに、こちらの赤いボタンを押していただくと『たのしさ』を引き落としていただくことができます。すると、悲しい気持ちもふっとびすぐに立ち直ることが出来るでしょう」

なるほど。『たのしさ貯金』とはすなわち感情をコントロールできるシステムなのだ。とユキエは理解した。好きなときに楽しい気持ちになることができるのは確かに便利かもしれない。

しかし、迷ったすえユキエは断った。

「いいお話ですけど『たのしさ貯金』は遠慮しておくわ」

「そうでございますか」

ユキエは目の前のパンフレットを手に取り、何かを探すように男に聞いた。

「ところで、貯金できるのは『たのしさ』以外にはないの？」

曇っていた男の顔がぱっと明るくなった。

「もちろんございます。『うれしさ』『すがすがしさ』『きもちよさ』などなど、ユキエ様のような素敵なかたに対して少々はばかれるのですが『いやらしさ』なんてものもございます」

「『かなしさ』はあるの？」

「『かなしさ』、でございますか？」

「そう、悲しいの『かなしさ』よ」

「あるにはあります。しかし、なにぶんその性質上、契約者ゼロの不人気商品でございます」

「ええ、けっこうよ。わたしが契約者第一号になってあげるわ」

男は本当によろしいのですかと念を押してきたが、ユキエはかまわずにその場で『かなしさ貯金』の口座を契約した。

男が帰った後、ユキエはまたソファにもどり、先ほどまで読んでいた本を手を取った。

近々クランクインする映画の台本だ。

映画製作会社の50周年記念というふれこみの大作で、想像を絶するきびしい逆境のなか、それでも健気に生きる女性の物語だ。

ユキエはそのヒロイン役に抜擢されていた。

「ちょうど良かったわ。あまり泣いたり、悲しい演技には自信がなかったのよね」

ユキエは台本を閉じテーブルに置いた。そしてソファに腕組みをして座り直し、どうやって『かなしさ』を集めようかと考え始めた。

## かなしさ貯金

<http://p.booklog.jp/book/39155>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39155>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39155>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.